
銀魂 ジジイになってもあだ名で呼びあえる仲間をつくれ

琴椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 ジジイになってもあだ名で呼びあえる仲間をつくれ

【Nコード】

N0456J

【作者名】

琴椿

【あらすじ】

いつもだらしのない銀サン。

…幼少時代の彼はどんな子供だったのか…??

そして、恩師吉田松陽とは…??

プロローグ（前書き）

いやあ、はじめてのしりあす!!

しかもねつ造ときたら…

ひまだったら読んでくださいませ。

ブローグ

「…」

桜舞う季節。

銀時は一人で出かけていた。

…彼の見つめる先には、ところどころ焼け焦げてしまっている古びた門。

…ここはかつて、銀時と桂、高杉が学んでいた寺子屋だった。

…そのとき、彼の脳裏に浮かんだのは…。

「松陽せんせっ!!」

ふてぶてしい顔に似合わないくらいの笑顔で駆け寄る子供。

それを見つめるあの人は、いつも眩しかった。

俺のゆがんだ魂を、まっすぐにしてくれたのは、

一人さまよっていた俺に声をかけてくれたのは、

いつもほほ笑んで、ただただとなりにおいてくれたのは…。

あなただけでした…。

プロローグ（後書き）

いやん短い！！！（きも）

次話投稿、もちっと待っててください…

01（前書き）

意外と今日中にできたよ

次話投稿〜ww

「ちっ、これっぽっちだよ」

俺はいつものように、手に入れた刀で旅人を斬っては財布の中身を確認していた。

懐に飯でも見つけようものなら奪い取って食べはじめる。

「不味い…。」

…ザッ。

不意に足音が聞こえ、耳を澄ます。

「…屍を食らう鬼がいると聞いて来てみれば…君がそう?？」

…誰だコイツ。なんだこのロン毛。

「またずいぶんとかわいい鬼がいたもんですね」

【かわいい】??…コイツ、バカにしてんのか?

俺は頭に乗った手をはらいのけると、鞘から刀を取り出した。

…コイツもやつちまうか…。

「それも屍からはぎ取ったんですか?」

しつけーな。なんなんだよ…ッ!

「童一人で屍の身ぐるみをはぎ、そうして自分の身を護ってきたん

ですか？」

…何が言いたい。

「たいしたもんじゃないですか。…だけど」

男は自分の刀に手をかけた。

…俺とやる気か？

「そんな剣…もういりませんよ。他人におびえ、自分を護るためだけにふるう剣なんて、もう捨てちゃいなさい」

…ヒョイ。

男の刀が宙を舞う。

「…！！」

それは俺の手にすっぽりとおさまった。

「くれてあげますよ、私の剣。」

「……」

「そいつの本当の使い方を知りたきゃついてくるといい」

「……」

「これからはそいつをふるいなさい。敵を斬るためではない。…弱

き己を斬るために。」

…はじめて見たそいつの背中。
大きくて、大きくて…。
とても、眩しかった。

「己を護るためではない…」

俺は…。

「己の魂を護るために」

“己の魂を護る”??

アホらし…。

…ザリ。

男は俺に近づいてきた。

…一応警戒する。

「…!?’

しゃがみこんで俺に背を向ける男。

「おんぶ。たまには背負われてみるのもいいでしょう」

「…ガキあつかいすんじゃないよ…」

男はクス、と笑い、

「…はじめて聞きました、君の声。…やっぱり可愛い」

俺に向けた笑顔は、

「う…ッ!」

眩しすぎた。

「…どうしました？」

涙をボロボロ零す俺を心配する男。

「ふぎ…ッ…うあ…ッ」

ずっと、一人だった俺。

そんな俺を救ってくれたのは…。

…松陽先生、アンタだった。

01（後書き）

うわっほい、銀サンが泣いてる…

ありえねエ…

02（前書き）

あさってディズニーだあ…。

さむそ…。

松陽はしゅつようと読みます。

背負われ、歩いた道。

泣いた自分が恥ずかしくて、ずっとすねていた俺。

「…私は吉田松陽と言って、寺子屋をしています。…君の名前は？」

「坂田…銀時。」

「…銀時君？いい名だ。」

吉田松陽と名乗った男はまたほほ笑んだ。

「…どこに？」

「私の寺子屋ですよ。君くらいの子が…二人ほどいる。紹介しよう」

連れてこられたのは、ボロボロの家。

「…小太郎、晋助、こっちにおいで」

「松陽先生エ、コイツの髪うぜえ」

「バカかお前。さっきからいつているだろう、これは地毛だ。切る気もない」

…目に映ったのは、睨みをきかせたふてぶてしい奴と、うざったい
くらいの長髪の奴。

「…先生エ、誰コイツ」

「坂田銀時君。今日私が拾ってきた子だ。君たちと同じくらいの歳
だよ。仲良くしてやりなさい」

…長髪の奴の視線が俺の頭に集中する。

「…お前すげー天パだなあ…」

…なツ！…！！

「ロン毛のオメーに言われたかねーよ！…」

「んだア！ロン毛の何が悪い！…」

「やめろよツラア」

「…なんでツラ？」

「名字がかつらだから。」

「ふう〜ん。…ツラア〜」

「高杉イ！余計なこと教えんな！…」

…ほんとにオメーらはうるせエ奴らだったよ。

…でも、オメーらがいてくれたおかげで、今の俺があるんだ。

「…仲良くなりそうですね」

…高杉晋助。

…桂小太郎。

お互い、背を預け合う存在になるのは、まだ先の話…。

02（後書き）

…にたよーな話がいっぱいあるでござんす。

でも、オリジナリティ全開で、

琴、いつきまあゝす。

03 (前書き)

もーいっこ投稿できた…!?

どんだけ…

きゃー……。アハハハハハ……。

「オメーいい加減ぶつた斬ってやるーか？あん？」

「なんだ、やってみろコラ。ついでにそのヅラ取れバカ」

吉田に引き取られた俺だが、他のガキのように遊びまわるわけでもなく、ただ部屋のすみに居るだけだった。

やることといえば、高杉とヅラのケンカを眺めることや、鳥の様子を見ていることぐらい。

「……」

「……」

ケンカしていた二人は手を止め、こっちに目を向けた。ここに来てから、あまり言葉を交わしていない。だが、ちょこつと気にはしていたようだ。

「…天パ。お前もなんかしろよ」

なんかしろって言われても。

「無理強いするのはよくない。まだ慣れていないのだろう？」

「……」

相変わらず黙っている俺。

ぐううう…。

「ッ！！」

ずっと我慢していた。

「オメー腹減ってんのか？」

「そういえば朝飯食ってなかったな」

「…っるせ」

「なんかもらってきてやるよ」

その風貌に似合わず、意外とおせっかい焼きな高杉。

「アイツ、顔あんなんだけど、実はやさしーんだよ」

ツラが小さく笑った。

…こいつら、ケンカばかりだけど、実はものすごく仲がいいんじゃないか。

そう思った。

「オイ、松陽先生が握り飯つくってくれたぞォー…」

高杉の持つ皿には、いびつな形をした握り飯が三つ。

「なんでお前らも食うの」

「いいだろ別に。んで…。銀時でいいや。お前はなんで一人だったんだあ??」

右にヅラ、左に高杉がちょこんと座った。

…はじめて呼ばれた名前が、なんだかこそばゆかった。

「ちつとな。お前らは?」

「…親が殺されてな。路頭に迷っているところを先生に救ってもらった。」

短いため息を吐きながら、ヅラが言った。

「俺は勘当されてなア親に。…捨てられたってわけだ。あとはヅラとおんなじ」

「…まったく、先生がいなければ俺たちはいったいどうなっていたことだろう」

「死んでたんじゃね?俺は…多分な」

「…先生には感謝しなければならぬな」

「…あア」

「ふーん…。」

…どこまでお人よしなんだあの人。

ガキと手まりで遊ぶ吉田を見つめる。

「オメーもあの人に魅かれてここに来たんだろ？」

…魅かれてエ??

「ちげエよ。飯くれそーだったから」

俺がとっさに出した言葉は、本当だけど少し違った。

“魅かれる”というより、はじめて俺に、笑顔で接してくれる人だったからだ。

…この人なら、俺の寂しさに気づいてくれるかもしれない。

…そう思った。

…それが魅かれるってことなのか??

03 (後書き)

いやあ〜ねつぞーはやっぱり怖い!!

キヤラ崩壊しまくっちゃってるよ!!

助けて…

04（前書き）

桂と高杉のケンカを書くのが楽しくなってきました

どうしたらあそこまでけだるい銀サンができるのか…。

楽しみながら読んでくださいネ♪

「お前って、強い？」

少しずつここにも慣れ始め、いつものようにジラと高杉と時を過していた。

「何、いきなり。」

…言っている意味がよくわからなかった。
でも、強いが強くないかと聞かれたら…。

一般的には強いというのだろうか…。

「強いですよ、かなりね。」

「松陽先生…」

「大の大人を一人で斬り倒してしまうほどですからね。」

「…」

…そんなかつこいいもんじゃない。
飯ほしさに、刀振り回して暴れまくってただけだ。

「どうですか？小太郎か晋助、どちらかと手合わせしてみませんか？」

「…え」

展開が早すぎる。

今まで、ヅラと高杉が稽古に行ってる時は一人で過ごしていたから、二人の強さなんてまったくもって知らない。

…それに、コイツらと殺り合うことなんてきつとないから、少し安心していたのかもしれない。

「…俺、銀時とやってみたい。」

高杉が言った。

「…俺はしないからな。どっちかというと銀時の強さをみてみたい。」

ヅラは殺り合うことに興味はないようだった。

「…何コレ」

ボロボロの木の刀。

「竹刀というやつですよ。さすがに稽古で真剣は使えませんからね。」

「しない??」

…はじめて真剣意外のものを持った。

ホントにボロボロで、粗末なヤツだったけど、真剣よりあったかい
気がしてならなかった。

「…晋助、相手は新入り君ですからね。」

「…先生エ、そんな必要多分ねーぜ」

ヅラとケンカしている時の高杉の目ではない。

…真剣そのものだった。

「あいつは…銀時はきつと強エ。」

「…勝負は、一回相手の身体を叩いた者が勝ちとします。それでは
…」

…キユ。

裸足が床をこする音。

「…始めッ!!」

…高杉はめっぼう強かった。

攻撃をしかけてもしかけてもかわされてしまうのだ。

しかし、こっちも伊達に大人を斬ってきたわけではない。

いとも簡単に…というわけではないが、高杉の攻撃をよけていく。

空が茜色に染まったというのに、道場からはまだ竹刀の打ち合う音が響いていた。

俺も高杉も、もうすでに肩で息をするまでに。

「…なッ、なかなかやるなお前…」

「ちっ、お前もな…ッ！」

…そしてまた竹刀を振り下ろそうとしたそのとき。

「…今日はここまでにしましょうか」

「…!!」

まだ決着はついてない。

高杉と引き分けのまま終わるのは、俺のプライドが許さなかった。

「そろそろ夕ご飯の支度をしなければならいのでね。君たちも手伝ってくださいるか？」

…ああ。

俺は仕方なく手を止めた。

…俺はこの笑顔に弱いんだ…。

認めたくはなかった。

けれど、どうしてもこの笑顔にはかなわない。

この笑顔を見ると、つい甘えたくなってしまうのだ。

…その背中に、飛びつきたくなってしまうのだ。

「……」

ふと高杉に目をやった。

俺と同じく、悔しそうだった。

「…手伝うか」

ツラがほほ笑んだ。

「…そうだな。行くか銀時、ツラ」

「…ツラじゃない桂だ。」

「…あゝ腹減った…」

…まったく、コイツらはどんだけのんきなんだ。

…あ、俺もか。

空では、初めてできた家族と俺に、星が優しく笑いかけていた。

04（後書き）

そつだよぉ〜銀サンはのんきですよ〜（笑）

…私ですよ〜…

「…早起きですね」

「…!!」

道場にて。

昨日高杉と打ち合ったところに俺はいた。

「…昨日のアレ。楽しかった」

「打ち合いをしたのは初めて??」

吉田は俺のとなりに座った。

「晋助、手ごわかったでしょう?」

「…ああ、すげーつかれた。」

「…小太郎も、晋助も、ここに来たばかりのときは君と似ていたよ」

「…なんで俺を拾った??」

ずっと気になっていたこと。

鬼と呼ばれ、恐れられていた俺を、どうしてここに連れてきたのか…

「同情か?」

「…同情？そんなつまらないものではありませんよ」

「じゃあどうして…」

「そうだな…君があまりにも弱かったからだ」

「…は??」

昨日は“強いですよ”って…。

「君のふるう剣は…醜い。己を護ることしかできないなんて…」

「…」

「小太郎も晋助も、最初はそうでしたよ。他人とかかわるのを恐れ、殻に閉じこもったままだった。…でもそれではだめだ。」

吉田の顔は真剣そのもの。

昨日見た高杉とどこか似ていた。

「誰かを護るために使わなければ…。誰かを護ることで、初めて強いと言えるのですよ」

…始めて会った時も言っていた。

“護れ”と。

「…なんか“ギゼン”っぽい。」

「偽善。ずいぶん難しい言葉をしっているんですね。…そう思われ
ても仕方ないかもしれません。」

「…アンタ、ツラや高杉も引き取ってんだろ？そんなことしてなん
の得になる？」

「…”得”そんなこと考えているから君はまだガキなんですよ」

「…あ？」

…吉田の声が震えているように聞こえた。

…気のせいだったのか？

「…損とか得とか、そういうこと考えているだけ時間のムダなん
です。」

「……」

「私は、君たちに教えなければならぬことが山ほどあります。そ
うですね…」

「…？」

「私と一手、打ち合ってくださいませんか？？」

05（後書き）

勝手な想像ですが、松陽先生はSな気がします。

MだったらMで、ヒキますからね…。

銀サンのSも、松陽先生から来たんじゃないんでしょうか??

…あ、もともとか??

…打ち合い？何言ってるの？？

「マジかよ…勘弁しろよ…こちとら疲れてんだから…」

「???そうですか？」

…いつになく楽しんでいる吉田。

…これが【えす】というやつか？？

まあ、奴はやる気満々でも俺はそんなくだらねエもんじゃない。

…高杉は…なりゆき？？

「打ち合いと言っても、稽古のようなものですよ。晋助も、小太郎も、私の稽古を受けています。」

…それは知ってる。

ヅラも高杉も、いつも早起きをして道場に向かうから。

…俺はそんなに早く起きれないし、なにより吉田の稽古というやつには興味なかった。

ヅラはウザいくらい誘ってくるけど。

「無理無理。体力もたねーって。そんなもんヅラとか高杉とかその

へんでいーだろ」

「…逃げるんですか??」

嘲笑つかのような言葉。

「…アンタは人をム力つかせんの得意だなア」

「本当のことを言っただけですよ」

…チツ。マジでム力つく。

俺は見えないように頬をふくらませた。

…見られたらまたかわいいとかバカにされるに決まってる。

「…あゝわあったよツ!!アンタ強エんだろ?ちょっとは手加減しろよな!!」

めんどくさいことはものすごく嫌だったが、俺は奴の挑発(?)にまんまと乗ってしまった。

吉田は眩しく笑ってみせた。

………めんでエ。

俺は長いため息を吐いた。

…ちょうどヅラたちが起き出す時刻になる。

俺は”腹が減ってるから”と言って道場を後にした。

「めずらしーな、銀時が俺たちより早く起きてるなんぞ。」

「いいもん見たぜ」。お前の寝顔!!」

俺は目をこすっている高杉に意地悪く笑いかけた。

「なんだアお前、天パの分際で!!」

「お前に天然パーマの苦しみがわかるかア!! いっぺん天パにしてやろーか!？」

「死んでもご免だそんな汚ねエ天パ!! ってゆーか死ね!!」

…俺は今まで、ただ高杉とヅラのケンカを見ているだけだった。

が、いつしか高杉のケンカ相手は俺が務めるようになってしまったのだ。

…ヅラいわく、高杉には長髪より天パの方がイジリやすいのだそうだ。

…まったく、なんでそんなくだんねエことで俺が…。

…しかし、俺たちが心を解け合える関係になっていったのは事実だ。
悔しいが、実際コイツらといるときが一番楽しい。

飯のときはお互いに取り合って。（だいたいヅラが負ける）

風呂のときは沈めあって。（吉田に怒られて終わる）

ヅラと二人で高杉をいじめたりもした。（身長差があるため、だいたいこっちの勝利）

…ケンカしかしてねエ。

でも、俺にとってはこの時間が幸せだったよ。

吉田の『稽古』はこの後……………。

06（後書き）

高杉ってなんでチビなの??

ぎゅ、牛乳飲んでないから??

んなこといったら銀サンはいちごとコーヒー牛乳しか飲めないよね
え…

…うゝん…^^;

07（前書き）

ああ…。ね、ネタがああああ…。

無いよ…（泣）

早く銀サンに「先生」と呼ばせたいww

「…準備はいいかな？」

手に持った竹刀を再び握りしめる。

「それでは…始め。」

俺は首の骨をコキコキと二回ほど鳴らすと、吉田に飛びかかった。

…カンッ！！

刀同士がぶつかったとき、竹刀独特の丸い音が響き渡る。

「威勢がいいですね…」

軽く跳ね飛ばされる身体。

舌打ちをし、すぐさま床を蹴り宙に舞う。

「…うらッ！！」

するりとかわされ、竹刀は床に打ちつけられた。

「…アンタさっきから何？かわしてばっかでなんもしてこねエじゃ

ん。ナメてんのか？」

「…いいえ。私は教え子に刀を振るうのは好きじゃないですよ」

「だけれがオメーの教え子になっただよっ！」

「あれ？それは残念ですね。私は君を拾ったあの日から、ずっと君を教え子だと思っていました。」

「…けつ。俺にはただの”飯くれる人”だよっ！」

「…前にも言いましたが、私は道場だけでなく寺子屋もしているんです。…君は私の授業を受けてくれないんですか？」

「…じゅぎょー？」

…初めて聞く響き。

「授業とは、たくさんの仲間と、友人と、共に学ぶことですよ」

「”学ぶ”??」

「もちろん、大半は勉強ですがね。でも、私が教えているのは勉強だけではありませんよ」

…自分の手が止まっているのに気付いた俺はあわてて竹刀を持ち直した。

…ギリ。

「君にも教えたいことが山ほどあるんですよ？残念ですね…」

…今は集中しなくては。

「…剣術も、君より晋助や小太郎の方が一枚上手だ。君はがむしやらに刀を振り回しているだけですからね。」

「…あたりめーだろ。誰にも教わってこなかったんだからよオ」

…でも。

俺よりツラや高杉の方が強いことはわかっていた。

昨日を思い出す。

高杉の剣さばきは、どこをどう突けばいいか把握しているかのようだった。

それに比べたら俺は…。

…ヤツらの強さはコイツの教えの賜なのか？

悔しい…。

もっと、強くなりたい。

「今からでも遅くはありません。私の稽古を受けてみませんか？」

「…」

【そいつの本当の使い方を知りたきゃついてくるといい】…。

俺の振るう剣に、いったいどんな意味があるのか…

…俺は、誰かのために、戦いたい。

そのためには…

「…やる。」

「…え？」

「俺、アンタの稽古とやら、やってやるよ」

…真剣なまなざしを奴に向けると、奴は満足そうに笑ってみせた。

「…それでは…。呼び名を変えてもらいましょうか？」

「は??」

俺はいつも、この人のことは“アンタ”とか“吉田”とか呼んでいた。

「…私も一応師匠ですからね」

…高杉やヅラは…

「…先生…」

小さくつぶやく。

…初めて呼んだ、先生という名。

「…松陽先生…」

「…いいですね」

…“先生”は、その場に刀を置くと、まだ明るい外に消えていった。

「…先生」

確かめるようにもう一度呼ぶ。

「ちつ。やっぱりまだ慣れねエな…」

俺は静かに笑った。

07（後書き）

…そつ、そろそろ先生が…ッ!!

あ、いや、まだにしところかな??

まだ銀サンと先生、仲良くなっただっかし。

08 (前書き)

あと二話くらいしたら…ッ！…！…！

ごめんね銀さん…。でも、こーゆー設定にしたのは空知先生だからね！？

うらまないでね…

「遊びに行きませんか?。」

翌日のことだった。

その日は天気もよく、出かけるには最適だ。

実際、俺はどこにも行っていない。

「行く行く!!どこ行くの!?。」

高杉は明るい笑顔ではしゃいでいる。

…こうやってみると、コイツも俺もヅラも、まだガキなんだよな。

「そうですね…。近くに野原があるんです。お弁当持って行きましようか?。」

「いいですね…。銀時、お前も行くよな?。」

ヅラの問いかけに、頭にはクエスチョンマーク。

「はあ…。」

俺たちはどこに行くにも一緒だった。

いきすぎたケンカで口を利かないときもあったけど、そんなときはいつも先生が助けてくれた。

“せっかくできた初めての友達でしょう？”

…友達なんかじゃねーよ。

ふてくされても、友達という響きが俺には嬉しかった。

「…行くよ」

「なア、この前みたいにみんなでつくろーよ、弁当」

…高杉の提案に、ヅラも先生も賛成した。

俺はというと…

「あゝ、銀時、この前指切ったから怖くなったかア!？」

高杉がニタニタ笑う。

…確かに、高杉と打ち合いをしたあの日に、しゅしゅ包丁を持った
ら、あんがい重くて。

…人差し指を浅く切ったとき、正直ビビった。

料理なんか二度とやるか!!

…そう思った。

今まで幾度となく人の命を奪ってきたのに…

「こら。…やりたくなかったらいんですよ、見ていてくれれば。」

「…やってやらア。見てろよ！絶対お前らよりも美味しいの作ってやるからな！！」

高杉とヅラに指を向け、宣言する。

「上等だコラ。やれるもんならやってみろ」

…高杉は料理も上手い。

いつも先生と台所に立っていたためか、知恵を身に付け、今は先生よりも上達したとか。

…負けるかッッ！！！！

…高杉にはヅラよりもライバル意識を持っていて、絶対に負けたくないと思っていた。

ただ。

あの日から一回も台所に立っていない俺は、まともな料理なんか作れるわけもなく。

卵焼きは中まで焼けていなく、形もぐちゃぐちゃだったし、

握り飯は具を入れたつもりでもいつの間にかどこかにいつてしまう始末。

…とにかく、すごい料理ベタだったってわけだ。

…そのときの高杉の勝ち誇った顔と言ったら…。

…まあ、根はイイ奴だから。

弁当が完成した後も、高杉は料理教室を開催してくれた。

【うぎゃー！！お前ちげエって！！なんか変な…！！】

【よッ！！おわ！？なんか爆発したぞオ！？】

【て、手伝いましょうか？】

【ダメー！！先生たまぁにすんげーモン生み出すから！こっち来ないで！！】

…おかげで服も台所もところどころ焦げてしまっているけれど。

「とうちゃく」

日曜ということもあり、広い野原は人がいっぱいだった。

人見知りの俺は、人に自分の容姿を見られたくなくて、先生の後ろに隠れた。

…紅い眼に、銀の髪。

“鬼”だとか“化け物”だとか言われ続けた俺。

…気分が悪い…

「…銀時。大丈夫ですよ…」

…どうしてこの人は俺の気持ちができるんだ…??

「おい、こことかいいぞー!!」

「行こう…銀時」

ツラも高杉も…

「…なんだアイツ…バケモンか…？」

嫌でも耳に入ってきた言葉。

…誰のものは、わからない…。

…頭痛がする…。

「テメエエエエ！……！！！」

怒鳴り声がした。

驚いて振り返る。

「たか…」

高杉は、あの声の主であろう男につかみかかっている。

「コイツのどこがバケモンなんだよッ！？あ”！？言ってみろよッ
！……！！」

「んだあクソガキ！！！！殺されてーのか！？」

「…申し訳ありません。まだ子供なもので。お引き取りただけま

せんか？」

「…チッ！…ちゃんとしつけとけおっさん！…！」

男はそう吐き捨てると、連れと一緒に去っていった。

「……ッきしよ……」

高杉の目には、うつすら涙が光っていた。

…お前が言われたわけじゃないだろ…

なんでお前が悲しむんだよ…

なんで俺のためにそこまでするんだよ…

こんなの、かわいそうだ。

「…いいよ…俺、へーきだから…ごめんな…高杉」

「なんでだよ…。お前は人間だろ！？化け物呼ばわりされる意味がどこにあんだよッ！？」

「…晋助…大丈夫だ、落ち着きなさい…」

「せ、先生だって…ッ」

……コイツは、人のためにこんなに泣ける奴なんだ。

こんなに…一生懸命になれる奴なんだ…

…ごめん。

…ありがとう。

08（後書き）

いいね…友情です…

高杉もイイ奴なんですよ、みなさん。

…ツラさん、出番少なくてごめんね…；

09（前書き）

いやっほう、メリクリ

「……」

弁当を広げ、その場に座る俺。

先生もツラも、そのあとに続いた。

「…高杉く、お前の分食っちゃうぞー…」

「…なんでそんな平然としてられんだよ…??お前…ッ、傷ついてんだろ…」

「ったくよ。何度も言わせんなっつーの。俺はマジ平気だから。あんなの慣れてっし。それに、人っぽくないのも事実だしなア」

…先生が悲しそうな顔をこちらに向けた。

ツラはただ、じっとしているだけだった。

「…ッ、俺…帰る。気分悪い…」

高杉はいらだちを隠せないようだった。

「晋助…」

「先生エ…ちょっと行つてくらア」

俺は高杉の小さな、悲しそうな背中を追った。

「…高杉…??」

「…なんだ…来たのか??」

「まだ怒つてんの?」

「…ツチ。別に…」

いらだちを抑えようと頭をかきむしる高杉。

「3度目だけど、俺なんとも思つてねーから…。あんな雑魚に本気になんなよ…」

「言えばいいだろ!!」

ビクッ、と身体が反応する。

胸がざわつく…。

「悔しかったんだろ！？苦しかったんだろ！？自分の感情殺すなよ！！泣けよ！怒れよ！

…せめて、俺たちの前でだけは…」

「高杉…」

自分より小さな身体が小刻みに震えている。

「俺にとって…ツラも銀時も大事なダチなんだ。もっと頼ってほしいよ…」

高杉は崩れおちるように座った。

…俺もそのとなりに座る。

…あのときと一緒だった。

3人で、飯食いながら生い立ちを語り合った…あのときと。

「…あのなア。別にお前ら頼りにしてねエとか、そんなんじゃないよ？」

…俺だって、悔しかったり…辛いこともあった。お前らはさ、俺のダチで、家族なんだ。

…心配かけたくなーんだよ…」

「…ね…」

「…わーったら二度とおんなじこと話させるんじゃねーよ！…俺だ
ってホントはこんなハズいこと言いたかねーんだからッ…」

頬をふくらませてぶすっと言っ。

「…照れてんのか？？」

「ッバゝカ！！んなわけねーだろ！！お前斬るぞコラア」

顔が熱いのはきつと…太陽のせいだ。

09 (後書き)

うん、そろそろ...

10（前書き）

冬休みに入っただんで暇してます！

私の作品が気に入った方は感想やメッセージなど、どしどし！

「こんなの書いてくれたらな」というリクエストも受け付けております。

「…げほ…ッ」

あの日、どこからもらってきたのか、カゼをひいてしまった俺。

あの一件以来、高杉とは言葉を交わしていない。

…ケンカもしなくなった。

「調子はどうだ?？」

「…ッラ。」

ッラもまた、どこか気遣っているように見える。

「ちっ、37度くらいで騒ぎすぎなの先生はッ!！」

「…バカはカゼひかないと聞いていたのにな。驚きだ」

「バカはオメーだロン毛ヤロー。カゼうつっ…らねーか、バカなんだから。」

「口だけは達者だな。これくらいなら安心だ。それと、高杉のことなんだが…」

「…久しぶりに聞くなアその名前」

「まだこの前のことがショックみたいだ。そうとう悔しがっている」

「…ったく、言われた本人がどーってことないのに、なんでアイツがあんなにふさぎこむのかね。」

「…それだけダチ思いだってことだ。感謝するんだな」

ヅラは握り飯を置いていくと、部屋を出て行った。

「"ダチ思い"ね…」

意味のない笑みをこぼす。

「…大丈夫ですか？」

「次は誰…んあ、先生か」

「熱は…少し下がったみたいです。良かったです」

「…うつつちやうよ？」

「大丈夫ですよ。バカはカゼひきませんから」

…ヅラとおんなじこと言ってる。

「…何かおかしいですか？」

「いや別に…似てるなアって思っただけ。」

「…そうですか」

…ふわ…

先生の白い手が俺の髪に触れる。

「最初に会ったときから好きでしたよ…この髪」

頭を行ったり来たりするのがくすぐったくて、目を瞑る。

「ふわふわして…やわらかくて…天然パーマもいいですね」

「…先生…」

「君は化け物なんかじゃありませんよ。確かに最初は恐ろしかった。でも、よく考えたらただのかわいい子供なんですものね…」

「アイツらは…どう思ってるかな…」

「…小太郎と晋助ですか？」

小さく、ゆっくりうなづく。

…アイツらは、俺を恐れていないだろうか…。

もしこれが、同情から生まれた友情だったら…??

“偽り”の、“隣み”の友情だったら…??

「…怖いんだ…」

「…君は？」

「え…」

「君はどうして彼らと一緒にいるんですか？」

「どうしてって…」

一番身近な存在で。

…ただのケンカ相手で。

でも、やっぱり大事な家族で。

「アイツらといるとね…。俺が俺でいられるような気がするんだ…。
“鬼”じゃなくて、“化け物”じゃなくて、ただの“俺”としてい
れる気がする…」

俺の話を聞きながら、先生はそうですか、と微笑んだ。

「…それが彼らの答えです」

…先生はいつも俺が求めている言葉をくれる。

それが嬉しくて、一緒になって笑った。

「高杉ッ！！」

「銀時…」

「ほーら、遊びに行こーぜ！！そんなとこいたら天パになっちゃうぞオ؟؟」

「…なるかバカ！！つかたねーな！！行くか！！」

…ほら、俺らはみーんなバカだから。

どんなことがあっても、笑顔でいられる。

「先生もッ！！ほらッラッ！！行くぞオ！！」

…先生。

…ツラ。

…高杉。

ずっと、一緒にいたかったよ。

ずっと、この幸せが続くと思ってた。

…なあ。

なんで俺たちは、平凡な幸せを掴むことが許されないんだろう。

…先生。なんで…???

なんで、死んじゃった？？

10（後書き）

松陽先生出番少ないよ……

11（前書き）

…さて、本格的なシリーズ始まります。

松陽先生が死んでから銀サンたちはどこに引き取られたんでしょう。

…想像するのが難しかった！！

どうして、こんなことになった？

いつものように、空が紅くなるまで遊んできた俺たちを、先生が優しく迎えてくれる…

…ハズだった。

どうして？

どうして？

いつもと変わらないハズなのに…

「松陽先生EEEEEEEE!!!!!!!!!!!!!!」

どうしてこんなに涙が止まらないんだろう。

「先生ッ…先生エ!!!!!!!!!!」

どうして？

どうして…???

なんで、燃えてる??

「うああああああ！……！！！！！」

俺は走り出す。

まだ先生とガキが残っているであろう我が家に。

「銀時イイイイ！！！！！」

遠くでツラの声がする。

「銀時……ッ……やめろッ！！！！！」

まだ、先生が、内に、いる……！！！！

「先生ッ！！先生がああああ！！！！！！！」

「大丈夫だ！！先生なら……ッ……きっと……！！！！！」

……そうだ。

先生なら、ガキ共連れてとつくに逃げてるよな？？

「…ッ、君たちここの子！？危ないからこつちに…！！」

「…おっさん！！ロン毛の人見なかった！？」

「…見てないねエ…」

「…ッ…先生…！！」

…生きてて。

…生きててよ…。

「バカだなア…。先生きつと料理失敗しちまったんだよ…。でもぜつてエ大丈夫…」

高杉が言った。

…まるで自分に言い聞かせるかのよう。

…俺はメラメラと不気味に光る炎から、目が離せなかった。

もし、もしまだ内にいるとしたら…??

…吐き気がする…

走ったときに落としてしまったボロボロの教科書を見つめる。

【はいコレ】

【…なにコレ】

【教科書ですよ。勉強…するためのね】

俺はいつも寝ているだけで、ろくに授業なんか受けたことがなかった。

【何度教えたらわかるのだお前。ここは…】

ツラに無理やり教え込まれたっけ。

「…授業、受けたいよ…」

次は、真面目に授業受けるから…。

血の気が引いていった。

なんだコイツら…。

「…内からね、大人と思われる遺体が見つかったんだ…」

「小さな子供も、たくさん…」

「…しかもね…」

先生が死んだというだけでも立っていられないくらいなのに…

…嫌な予感がする…

「…放火…なんだよ…」

「うあ…うわあああああ！！！！？？？」

“放火”…？？

先生は、殺された？

「なんで…なんでエ！？」

先生は、なんにも悪いことしてない。

なのに、どうして死ななければならなかったのか？

「目撃してた人によるとね…火をつけたのは幕府の人間らしいんだ…」

「…バクフ…??」

「国のお偉いさんだよ…」

「…ッ…なんでそんな奴らが…??」

「わからないなあ…ちょっと…」

“ 殺された ”

… 先生は、幕府に、殺された??

「…つぎつけんなよ!! 先生は何もしてねえだろ!?! なんで殺されなきゃいけないんだよ!!」

高杉が狂ったように叫ぶ。

涙が、止まらない。

先生が死んだなんて信じられないけど…

もし、本当に幕府とかいう奴らが殺したなら、俺は…

「復讐…」

高杉が力なくつぶやいた。

…まるで人形のように…

「おい!!」

ヅラがたしなめるように言った。

…そこまでは覚えている。

そこから先は、記憶がない…

唯一覚えているのは、星が悲しそうに煌めいていたというだけだ…

11（後書き）

いよいよラストスパートです。

最終話に向けて、一生懸命投稿する話考えるんで、どこか見てやってください

先生が死んで、俺たちは家を失った。

…あの日、遊びに行つてた奴ら以外はみんな死んだ。

先生を失い、家を失い。

…残つたのは…

抑えきれない、憎悪。

ふさがった心の穴は、大きな音をたてて開いていった。

俺たちは先生の知り合いの孤児院に預けられた。

…そこのおっさんは優しく、すごく良い人だった。

…けれど、懐くことはなかった。

「…銀時」

「……」

ヅラはもともと前向きな性格のため、なんとか立ち直れたようだった。

「…気持ちはわかる。でも、またあのように笑い合える日が来ると…信じている」

そっとしておいてほしいことを察したのか、すぐにその場を離れるヅラ。

「また あのときのように」??

先生は殺されて、環境は変わって。

…そんななかどう笑えと言っただ…??

ッラ。俺はお前みたいに強くないから。

笑うなんてこと、到底できない…

【復讐…】

ふとよみがえった高杉のあの言葉。

…彼はいつたい、何を考えているのか…??

……ああ、そうだ。

俺たちがやるべきことは…

先生の仇を…打つこと。

先生を殺した奴らを…

俺が、俺たちが、この手で潰してやるんだ…。

先生の仇打ちを口実に、攘夷戦争に参加するのは、そう遠くない話。

12 (後書き)

高杉でてこない……

「…遊びに行かないか？」

ヅラからの突然の誘い。

俺はまだ、現実に向き合えないでいる。

「…行かない。」

消えそうなほど、小さな呟きだったそうだ。

「…ダメだ」

「はい？」

…その質問、俺に答える権限はないのか？

「…最初っから聞くなよ…死ね長髪」

「お前…若いのにぐーたらしてたらなあ…あの…あれだぞ…なんか…あれだぞ」

「あれって何？もういいいぜエ」

…若いって…お前もだろ。

「それに、若いって言い方もどーかと…」

…なぜかツラは満足そうに笑っていた。

「何、気持ちわりィ…」

「うん、よかったよかった」

「何が?？」

「…この調子なら、いつもの銀時に戻ってくれそうなのがしてな…」

…コイツ。

…コイツはコイツで、俺のこと心配してくれてたんだ。

いや、前からそうだった。

ヅラは、わかりにくい優しさを、誰でも平等にくれるんだ。

そういう、奴なんだ。

「…励ましてくれてんの？」

「…そうともいうがな…」

「仕方ねーな…このままじゃハゲちまうからよ…」

「ハゲてもハゲでなくてもお前の頭の悲しさは変わらない。」

「オメーに言われたかねエ。んじゃ、高杉つかまえてくつか。」

…高杉はきつと俺以上に落ち込んでる。

「
…何」

荒んでいるのか、ぎろりと睨みつける高杉。

「い…いや、あのさ…どっか…行かねッて…」

「
…行かない」

さっきの俺とまったく同じ回答。

「
…ダメだ」

そして俺も、ツラとおんなじ。

「…俺にんのために聞いたんだよ…」

「リ…リフレッシュしよーぜ、たまにはッ！ほら、ずっと前に言っただろ？天パになっちゃうぞって」

「だから誰もならねーって言ってんだろしつけーな…」

…いつもと何ら変わらない。

些細なことでケンカになっている。

先生が死んだことの悲しみは一生消えない。

消えるわけがない。

でも、俺たちはなんとかやってけると思う。

だって、先生の子だもん…

でもね、先生を殺した奴らを、俺は絶対に許さない。

先生の仇は、絶対に打ってみせる。

14 (前書き)

時はめぐり。

時は巡り、俺たちは“子供”ではなくなった……

預けられた先のおっさんが病気で死んだ。

預けられたときからもう相当進んでいたらしい。

俺たちはそのことを、孤児院を出て行っただと後に知った……

孤児院を出てから、俺たちは3人で暮らしていた。

あの寺子屋がある町からずっとずっと遠い村に。

【…行くといつてもどこへ？】

【…ものっそい田舎がいいなア。近くには山も川も森もあって…静かなところ】

【…高杉らしいな。俺ア…まあそーゆーところでもいいかな…】

【家とかどーすんの？？】

【…ま、巻き上げる？？】

…いろいろあって、俺たちはここ…どこかは知らないけど…にや
って来た。

高杉のお色気パワーでちっこい家もゲットした。

ま、高杉はそれが恥ずかしくてしばらく外出歩かなかったようだけ
ど。

村長のおっさんに畑仕事をもらって、そこでなんとか生活を保って
いる。

すごく、すごく楽しい。

再び手にいれた、幸せ。

相変わらずケンカばかりの日々だけど、それがまた新鮮だった。

“坂本辰馬”

ある日、そつ名乗るモジャモジャが俺たちのところに訪れるまでは
……

14（後書き）

…いちおうハタチとか…そこらへんの設定

気になる高杉のお色気パワーが知りたければぜひ活動報告へ♪

「…今日は雨がひどいな…」

ツラが窓の外を眺めて心配そうに言った。

「…野菜、ダメになってねエといいがなア」

今日は月の綺麗な日だと聞いていたのに…

「…!!」

高杉が扉の方を凝視した。

「…えッ何！？なんか見えんの！？やめ、やめてくんない、怖いッ
 …!!」

松陽先生のところにいたとき、ガキに脅かされてすんげービビった
 のがトラウマになり、別に信じてはないが、幽霊というものを怖が

るようになってしまった。

「ぶっ、銀時、貴様まだ怖いのか??」

「うっ、うるせー!!あのガキ、今頃何してやがんだクソッ!!」

「…なぐんか来る…」

高杉の意味ありげな発言にドキッとしてしまう。

「やめ…てめー、いい加減にしるよッ!」

…どんッ!!

大きな音と共に扉が震えた。

…ひひひひひ！！！！

…本当に、怖いんですよ…

「…？？？鳥か？？」

高杉がけろつとした表情で扉へ向かう。

「おい！！やめろって！！マジ3000円あげるからなァ！！！！？」

…がらがら

「…？？」

…自分でも思っくらい女っぽい声。

ツラが笑いをこらえているのを見て、今度なんかあったときのネタにしてやろうと思った。

「…んが！？なんだコイツッ！？」

…鳥ではない。

…人だ。

頭には毛玉と見間違えるくらいのもじゃもじゃの髪。

天パとはまたちょっと違う…

「うわぁ〜コイツの頭銀時級だぞ！？そんな人もいるんだなァ〜」

「高杉イ！！後でお前覚えてろよ！！？？」

「そんなこと言ってる場合ではないだろう！！この男…怪我をしている…！！」

…確かに、男の体は血まみれだった。

肩で息をしているところを見ると…まだ助かる余地はあるが…

「いったいどこで作ってきたんだこんな怪我…」

世話好きのヅラは布団を引っ張り出して、男を寝かせた。

…ふう。

俺はため息をついて、男の顔をまじまじと見つめた。

…なんか…

変な感じが、した。

嫌な予感と言ってもいいだろう…。

15 (後書き)

やったあ、たつつんだあ

いきなり怪我させてごめんね…

しゃべり方のアドバイス待ってます

「ッるせエな……」

翌朝。俺は大きな笑い声で目を覚ました。

隣の二つの布団は空。

はだけた着物を直し、重い足を引きずって居間へ行く。

「……銀時、もうすぐ昼になるぞ??」

「アンタ……」

昨日怪我をしていた毛玉男。

「アッハッハ。おんしの頭、わしとおんなじよーなモンじゃの！
！初めて見たき…」

「…坂本辰馬さんというそうだ………」

さかもとたつま？？

「あ？わしゃきつとおんしらとタメじゃ。辰馬でいいぜよ」

「…ツアンタ、怪我は…！？」

「ああ、もう平気じゃきに。世話になったなア。…ところでおんしら、名は？？」

…名？？

「…桂だ。…ツラじゃないぞ。」

「それもうニツクネーム暴露しちゃってんじゃん。…俺ア坂田銀時
ってんだ。」

「…高杉だ」

…さすがは人見知りクン。

知らない人と見るとすぐ不機嫌になる。

「さてと。わしゃそろそろおいとまするぜよ」

「ッは！？貴様本気か！？容体は安定したとはいえ、かなりの怪我
だぞ！？」

「…っつーか誰にやられた？？」

「…わしゃこの頭じゃ。よく人に絡まれるきに。6対1ときたら、
勝ち目なんかないぜよ…」

…俺と同じだ。

「俺もよくあった、そーゆーこと。」

高杉が悲しそうに笑ったのを、俺は見逃さなかった。

「…これからどうするのだ?？」

「人集めじゃな。ここら辺に宿ないき?？」

「人集めエ???アンタどんな仕事してんだ?？」

「…祭りじゃ。」

「祭り!??」

…やっぱり。

高杉は祭りごとが異常に好きなのだ。

「…血祭りじゃき…」

“ 血祭り ”

高杉の笑顔が引きつった。

「…攘夷戦争って…知つとるか?？」

“ 攘夷戦争 ”

先生がよく聞かせてくれた…

「この国に変な輩が乗り込もうとしとるぜよ。…天人じゃ…。
ここは侍の国じゃき、…変なことはさせない。」

…！？

お調子者だと思っていた男の目が、変わった。

獣のような、目。

この男が戦争に参加しているところを想像するとゾッとする……

「……べじじや、おんしらも……」

相手は、この国を狙っている得体の知れない奴ら。

「噂じゃ、そこに幕府も関わっているらしいきに……」

意識が、飛んだ。

“幕府も関わっているらしい”

…先生の、仇。

この世で最も、憎むべき相手。

俺は、天人を倒すためじゃなく……

「時！！銀時！！」

「あ？？あ…わりい…」

ツラのおかげで俺は戻ってこれた。

…あのまま先生の仇討ちについてうだうだ考えてたら、発狂してしまっていたかもしれない。

「幕府って…あの幕府？？」

「…そうじゃが…何かあるきに…」

「
……」

「
……」

坂本の問いかけに、誰一人言葉を発することはなかった。

“ 恩師が殺された ”

そんな悲しい事実、何も知らないコイツに言えるわけない……

「 ……俺、その攘夷戦争に参加したい…… 」

高杉が呟いた。

【復讐…】

俺は咄嗟にあの言葉を思い出す。

「何言ってるんだ高杉！！冷静になれ！！戦争なんだぞ！？」

「…ツラ。俺…先生の子なんだよ…。親の仇討ち考えちゃダメなの

か…?？」

高杉の目は、憎しみよりも悲しみの色をしていて、今にも何かが流れ出していまいそうだった。

…見てられない…

「…事情はわからんが…思いは強いらしいの。じゃが賛成はできんき…」

坂本がそう思うのも、無理はなかった。

…戦争。

命を落とす覚悟で挑まなければ……

「…俺には目標がある。それを達成するまで、絶対に死なない……」

…生半可な言葉じゃないことくらい、俺にもわかっていた。

高杉は、先生が本当に好きなんだ。

そして、それは俺やヅラも同じ。

でも、もしコイツらが死んだら……??

俺はきっと、生きていけない。

先生を失い、コイツらまで失うのは………

だったら、ここで平凡に暮らしていくことの方が……

「…俺はやらない。」

想いが、口を突いて出た。

「銀時の言う通りだ。死んだらどうする！？先生が喜ぶとでも！？」

「…なら。…俺は一人でも行く。」

…高杉…

俺たちは、家族だよ…

お前一人でなんて、行かせられるかよ…

「お前の決心がそれほどまでに強いなら……」

俺は、行く。

天人退治じゃない。

先生の仇討ちでもない。

…家族を、護るために…

17（後書き）

遅れちゃいました……

「俺も行く。」

「銀時！！貴様まで何言ってるんだ……！！！」

「……ただし。絶対死なない。生きてここに戻る……」

「……思いは強いようじゃな。んだが、賛成はできんき……」

坂本が反対するのも無理はなかった。

戦争。

命がけで挑まなければ…

「…そこん人は賛成しとらんようじゃきの？？」
「」

ツラは断固反対だ。

…無理もない。

ツラにとっては、先生の仇討ちよりも俺たちの命の方が大事なのだ

……

「…絶対に死なないのだな??」

「…もちろん」

「生きて、戻ってくるのだな??」

「っ
たりめーだろ……」

…
ツラの、祈るような目が、すごくすごく好きだった。

…
それは先生譲りのようだ。

俺もいつか、あんな目になれたらいい……

「…
辛いものになるき…おんしらに…できるか…??」

揺るがない、心。

それは高杉が一番強い。

「……やる……!」

…先生。

もし生きていたのなら、きっと涙を流して反対するでしょう。

…あなたはそういう人だから。

けれど、それほどまでにあなたが眩しかったから、

俺たちにとってかけがえのない存在になっていたから、

俺たちの決心には、意味があるのです。

死なない。

コイツらを、護り通すまでは。

…死なない…

そして俺たちは歩きだす。

これから待ち受ける困難に、誰が気づいていただろう???

高杉が失ったものは、眼だけではない。

ツラが願ったものは、とてつもなく大きい。

…俺が流した涙は、海の水よりも多い。

もし、気づいていたのなら。

18 (後書き)

才手微妙。
W
W

19（前書き）

随分話飛んですが、それでもいい人だけ…

スマソ…

痛いんだ？？

「…銀時イ！！！！」

誰かが、俺の名を呼んでる。

けれど、それが誰の声なのか…

確認する余裕はない。

水たまりに映った俺の姿。

「…なんだよ…ッ…これ…!!」

“その髪が好きでした”

先生。

俺の髪ね、

…もう銀じゃないよ？？

…ねえ…

…赤いよ…???

「…ッくく…」

笑っちゃうね…

これね、

俺の血じゃ…ないよ???

でもね、痛い。

怪我はしてないのに、

痛い。

どこが痛いのかわからないから、

…余計痛い…

ついに、始まった。

19（後書き）

おっぱじまりましたあ！！攘夷戦争！！！！

すごく楽しみ…

ごめん、超シリアス。

20

「銀時ッ…平気か!？」

俺は、見つめる。

あの人がいるであろう空を。

あの人には、

太陽のもとで笑っていてほしかった。

だから、いつも晴天を願った。

けれど…

今日の空は、曇天。

ねえ。

先生…泣いてるの??

「…これ…俺が??」

見たくない。

認めたくない。

けれど。

俺の足元には…生温かい物体。

握っていた、刀。

「…ッ…そのような…」

「俺が、殺したのか??」

「…コイツらは敵だ…罪悪感なんか持たなくていい。お前はよくやった…」

そうだ。

攘夷戦争だ、これ。

こういう、人ではない何かを…排除するんだっ…

「……笑えよ……」

「……銀時……ッ!」

ツラ、笑え。

「俺……汚れてる……」

嘲笑え。

こんな俺を、

化け物の俺を、

笑ってくれ。

恐れてくれ。

どうか、どうか。

俺みたいな奴の、傍にいないで…

「…お前が、汚れる。」

汚れるのはさ…

俺だけでいいよ？？

俺は、人じゃないんだから。

鬼なんだから。

化け物なんだから。

楽に、
なりたい。

ああ。

「……殺して………？？」
」

2
1

「
…ダメだ。
」

どうして…??

気休めの慰めなんか、聞きたくないよ??

「戦争はまだ、始まったばかりなんだ。」

甘く…見ていた。

戦争を。

先生のおかげで、

コイツらのおかげで、

人に、なりかけていたんだ。

人を傷つけたくない。

そう、本気で思えるようになった。

だから、今回の戦争にも参加した。

俺のなかには、鬼がいる。

眠っていただけの、鬼が。

『人を殺したい』

…先生を殺した奴らを、俺たちの苦しみなんかよりももっとと深く…

傷つけて、グチャグチャにして、握り潰して、

…殺して、しまいたかった。

『人を護りたい』

誰も、傷つけない。

鬼の俺でも、

何かを、

誰かを、

…護れるんだって、思いたい。確証が欲しい…

戦争の参加は、そういうズルい発想から。

想い。

…矛盾だらけの…

自分を、護るために。

「…今日はもう止めにしよう…」

情けなくその場に座りこんだ俺を抱えるようにして小屋につれていくツラ。

「…銀時ッ…どうした！？何があった！？」

「怪我はしていないようだ。敵の血。…坂本、布団。」

「…金時…まだ始まつたばかりじゃ…わしゃ、おんしらの想いが強いからここに連れてきた。そう簡単に折れられては…困るぜよ…」

ああ。

そうだ。

俺たちの、わがまま。

勝手な理屈で、連れてきてもらったんだ…

こんなところで、コイツらに迷惑かけるわけにはいかない。

「アッハッハッ！！酒じゃ酒じゃ！！飲め飲めエッ！！！」

「…ほどほどにしておけ、いつ敵が来るかわからんだぞ?」

「お前も飲んでるけどな。」

楽しそうにする仲間たちをよそに、俺はひたすら空を見つめていた。

「…銀時イ…お前のおんみつ食っちゃうぞぉ…?」

「……」

「おい…銀時イ…??」

話しかけられていることに気がつかず、ぼうつとしている俺。

「…えッ…あ、わりい…何??」

「…せっかくチビ杉がボケたうちゅーのに、見てやらかわいそうじゃき…」

「チビ杉言つなア毛玉バカ!!死ねよマジ」

「一人にしてほしいならそうするが…平気か?？」

…ツラらしい。

だからこそ…

「…俺も飲むかなア…」

沈んではいけない。

戦いは、これからなのだから。

「デメエ！…何マジで食っちゃってんの！？返せッ！…俺のあんみつウ…！！」

「あゝおいしかったゝ残念だったなア天パ野郎」

「上等だア！！天人よりお前先に肅清してやらア！！死ねバカアアア！！！！」

「バカはお前だ！！名前書いとくこつたなアバカ天パ」

「うがアアアアア！！！！マジ殺すツ！！！！殺してやるツ！！！！！！」

…結局あんみつは取り返せなかったけど、俺にはこういうバカ騒ぎが一番合ってる。

思い出させてくれて、ありがとな。

(でもあんみつの仇は絶対とるからなチビ杉)

22 (後書き)

お、才チがああああ
… (笑)

「ッはあ…ッ…!」

苦しい。

こんな量さばいたのは初めてだから、けっこうキツい。

稽古もずうっとサボってたからな……

「へーきか銀時!？」

「そっちこそッ…気をつけろよチビ君…ッ」

合わせた背中を離し、うじゃうじゃ現れる化け物どもに斬りかかる。

“チビじゃねエし!!”

いつもと同じ高杉の怒鳴り声に勇気をもらう。

化け物どもと刀を交じあえる時、いつも頭にひとつの言葉。

『絶対に、生きて帰る…』

自分に負けてしまいそうになった時は、仲間と背中を合わせ、その体温で元気づける。

いつもふざけているコイツらだけど、いざって時はやる奴らだ。

仲間がやられそうになったら助けて、

…その反対も。

けれど、敵は予想していた数よりとてつもなく多く、毎日のように仲間が死んでいった。

こんなもの、意味があるのか…??

そんなことを思っては、明日を待つ日々。

食料は少なく、嫌になって逃げ出す者、餓死する者が後を絶たなか

った。

けれど、俺たちは逃げなかった。

何があっても、仲間を見捨てるようなことはしない。

それが先生にできる、最大の孝行。

…戦争中だというのに、滞在する小屋に笑いは絶えない。

疲れ果て、言葉を発せないときもあったが、そんなときは誰かがボケて、それをまたつつこんで。

助け合って、生きている。

けれどたまに、またいつもの平和な生活を思い出しては涙する夜もあった。

もちろんそんなの見られてはいけない。

見られれば、きっと全て壊れてしまうから。

…高杉。

…ツラ。

…辰馬。

コイツらだって、きっと泣いてる。

眼が、腫れているから。

悲しい眼を、しているから。

ああ。

今宵もまた、一粒の雫が、

血とともに、ゆっくりと流れおちてゆく。

「…ッ高杉イイ!!??」

のしかかる天人を斬って、探す。

さっきから、高杉の姿が見えない。

約束なのに…ッ!!

絶対に、それぞれ見えるところで戦うこと。

「高杉イイイ！！！！！」

…ぼつり。

「…雨か…??」

頭に何かが落ちる感覚。

違う……!!!!!!

血……!!!!!!

屋根の上に、誰がいる……!!???

「高杉!？」

近くの木から屋根に飛び乗る。

…信じがたい光景。

倒れる高杉は、左目を覆って唸っている。

その眼からは、大量の血。

「たかッ、うぁあ…ッ！！？？」

「…ッ痛ッ…！！！」

「どうしたんだよッ！！？？おいッ！！？？」

「…う…う…う…ッ」

後ろ！！！！

刀が風を切る独特の音。

咄嗟に刀でおさえる。

「……よお……よそ見てたら怪我しちゃっぞ……?？」

「……誰だアンタ……コイツやったのお前か……!?？」

「…ふッ。だったら??」

…その男は耳が尖っていて、大きな菅笠を被っている。

そのせいで、どんな顔かはわからない。

ただひとつ、言えるのは……

「…ッ
デメエ
…!!!!!!!!」

コイツは、ヤバイ……

でも。

どんな相手であろうと

俺の大事なものに手を出す奴は…

「うあああああああ……！！！！！！！！！！」

許さない。

25 (前書き)

キタ——!!!!

じょおおおい戦争うううう!!!!
↑

高杉を安全な場所に寝かせ、血の滴り落ちる刀を握り締める。

「アンタ…誰だ…」

「ああ…お前どこで見たことあると思ったら…あの寺子屋のガキか…?」

“寺子屋”…!!??

「ッ、アンタ、松陽先生の何を知ってる…!!??」

「さあ…?..」

意味深に笑う男に、殺意は募っていくばかり…

「…アンタ、先生殺した犯人…知ってんのか…ッ!!??..」

「…自分で確かめな…」

…殺してエ。

でもここはまず、高杉が最優先だ。

「…ッ…高杉…もう大丈夫だから…」

「…あ…！……！」

一瞬だった。

突然振り下ろされた刀を、高杉が必死に受け止めている。

「…ッ、血が…」

眼だけでなく、脇腹からも大量の出血。

それは瓦を伝い、地へ注がれていく。

「よ……そ見……ッ、してんじゃねエよ……バカ天パ……」

「……ッ……わりイ……!!……へーきか……!!……?……?……」

「……っともねーよ……それより……」

「邪魔だ」

…びゅん！！

血が、迸る。

と共に、右腕に痛みが走った。

振り下ろされた刀は、鎧を通り越し肉を引き裂いていく……

「…ぎゅ…ん…」

ああ…

刀で防げばよかった。

なあって、後から後悔。

「やつスェーコレ…手エぶらんぶらんだよ…」

「腕で防ぐとは…なっていないア…」

「まったくだあ……どーしてくれんだツツツ！……！！！」

使える左手で刀を握るも、利き手ではないため威力は右ほどない。

「…せめて利き手じゃない方にすりゃあよかったのにねエ…くく…」

「…もういーだろ??ちよ、どいてくんなアいおっさん??俺…ちよっと行くところがア…」

「…ふッ、お前は面白い奴だなア…またどこかで会いてえもんだ…」

甲高い笑い声を残し、男は去っていく。

(もう二度と会ってたまるか…ハゲジジイ…)

別にハゲてはなかったけど。

「…高杉…??」

…意識がない…

「…ッ、コイツはさすがにヤベエ…ッ!」

高杉を背負い、敵のいない屋根の上を走る。

…心配すんな、

お前は、俺が護ってやっから…

「あれほど無茶するなと言ったのに……」

まだ意識を取り戻していない高杉。

彼の左目に巻かれた包帯には、血がにじんでいる。

「……コイツの……眼は……?？」

ツラは何も言わず、悲しそうに首を横に振った。

「…そつか…」

ツラの瞳も綺麗だけど、高杉の眼も好きだった。

いつもは反抗的な眼をしているけれど、笑ったときはすごく優しく
て…

まだひとつあるとはいえ、そんな彼の眼が失われるのは悲しかった。

「…辰馬は…??」

「まだ暴れてる。お前らと一緒にで周りが見えなくなるタイプだから
な…」

「未恐ろしい奴だね…あのバカも…」

とめどなく流れてくる血の臭いに、身震いがする……

「銀時は……」その場”に居合わせたのか……?」

「……ああ……あのおっさんはヤベエよ……」

何人もの人を殺してきたような不気味な瞳。

……そして、

あの、意味深な笑い……

先生のことについて何か知っていそうだが、ということは伝えなかった。

…ただでさえ高杉のことで頭がいっぱいだろう。

これ以上混乱させたくない……

「…お前の怪我は…?？」

「あ??すっかり忘れてた……」

思い出すと共に激痛が走る。

「…鎧をも突き破るとは…すごい力だな…」

「どうしよ…これじゃああんみつもロクに食べねーじゃねエか…」

「あんみつどころか食料がない」

…戦場に病院などあるはずもないので、包帯でおさえることしかできない。

「…ちきしょーあのおっさんめえ………」

「…これでよし。坂本の様子を見てくるな…」

おゝ、と適当に返事を返し、顔を高杉の方へと返る。

「…すぐバカ騒ぎできるよな…??だつてお前バカだから……」

…もしかしたらこのまま一生目を開かないのでは、と不安になることもある。

…情けないよな。

確かに、参加を希望したのは高杉だ。

でも、コイツら護るとか勝手なことぬかして…

結局、コイツの力を信じることしかできないんだよな…

俺はなんて…無力なんだろう…

…あれ??

小屋のなかなのに、なんで雨なんか降るんだ…??

ああ、そっか。

…涙か。

…これで、何回目だろう。

苦しい。

…白旗。

なんて情けない色だろう。

…白夜叉。

なんて情けない響き…

「これだから、白は嫌いだ…」

白夜叉??

どこそこの誰かが勝手につけた名前。

由来なんか…知らない。

知りたくもない。

ガキのころから“鬼”だとか“化け物”だとかいう勝手な名前をつけられて。

誰も俺の名前なんか呼んでくれない……

どんなに孤独だったことが……

だから、白夜叉なんて、
…嫌い。

…白旗。

負けを認め、情けなく跪く。

なんて悔しい…

けれど、

仲間を護るためなら、

…俺はプライドさえも投げ捨てる。

なら。

白旗の色は、素晴らしい。

…もう…止めにしよう…

心の叫びは、小さな雫となってポロポロ落ちる。

…あ。

コイツも…泣いてる。

なんて綺麗な涙だろう…

でも、もう見たくない…

「高杉…」

様々な名前をつけられ、味方からも恐れられる男二人が涙を流す画は、きつと情けない。

けれど今は。

後ろに仲間二人が立っていることさえ気づかずに。

…泣いていたい、気分なんだ…

2
8

「銀時……」

辛い。

「……大丈夫だ……もう、泣いていいよ……」

両肩に乗る、二つの手。

それは大きくて、俺は小さな人間だって、改めて思う。

「…ッ、もう…終わりにしよう…」

まだ、暴れ足りないか???

「だって、こんなおかしいだろ…!?!?」

たくさん殺して、

たくさん殺されて、

…それでもまだ、足りないか…??

「…っん…」

強がらなくても、わかってるんだ。

俺の後ろで、二人とも泣いてる。

きつと、泣いてることにさえ気づかないだろうけど。

「…こんな続けていけるほど、俺…強くねーんだよ…」

もう、誰も死なせたくないんだよ…

「…」

涙と、想いの…色。

白旗。

28 (後書き)

白旗ってアレですね、降伏するときに持つてるってゆーやつ…

違うっけ??

『白旗だア!!』

『ついにアイツら…負けを認めたぞオオオオ!!!!!!』

天人どもの、歓喜の声。

…今はそんなの、どうだっていい。

涙でグチャグチャになった顔をしきりに拭いて。

誰も声は出さなくとも、心の声は一つ。

『もう、終わった。』

あれから意識を取り戻した高杉。

どうして泣いてたのか聞いたら、

『降伏して、いつもの生活に戻って、それが嬉しかったから…』

夢を見ていたようだ…

彼も、この戦争の終わりを願っていた。

『夢じゃなくて…俺たちの手で終わりにしよう…？？』

この血まみれの日々が過ぎたらいつたいどんな生活が待っているのか……

それは、まだ、わからない。

もう…

けねど、

終わっ
たんだ
よな…
？？

俺たちが生きているのは、奇跡と言っていいだろう。

4人とわずかな仲間たちの影は、長く長く伸びてゆく……

「……俺は……」
「……出てくわ……」

高杉は一つになった目で空を仰いだ。

「ふうん…宇宙にでも行く気か??」

「…どつだろっなァ??」

「俺はここに残る…」

「何?とりあえずそのうざったい長髪切るの??」

「この国はまだ腐ってる…まっすぐにして、先生が望む世界をつくりたいのだ…」

ツラらしい、まっすぐな瞳。

「え؟؟テロでもやるつもりですか??」

「わしも宇宙に行くぜよ…社員を集めて、小さな会社を作るき。」

「ほお…んじゃま、その7割は俺のモンな。」

「銀時は??」

一人名前を間違えてるモジャがいたけど、3人とも声が重なった。

「…俺もここに残ろっかなア……」

俺のことなんか誰も知らないこの国で、リセットしてやり直す…

先生がくれた、まっすぐな魂。

それは、コイツらの中にもある……

4人はお互いを見つめ合う。

確かな、固い絆を確認して……

そして、新しい出会い。

最終話（前書き）

ここまで読んでくださった皆様、本当に感謝いたします。

初めての30話越え…大変だったけど、シリアスな銀サンを書いてよかったと思っています。

次回作、楽しみにしていただければ幸いです。

最終話

さあ…

今日も良い天気だ…

「銀ちやあああんツッ！……！！」

はいはい、行くって…

ホントにつるっせエ奴ら…

「銀さん銀さん！！神楽ちゃんが僕らの分まで食べるんです！！助けてください！！！！」

でも、ま。

ありがとな。

こんな俺の、そばにいてくれて。

お前らがいるから、俺は俺でいれる。

…先生。

アイツらみたいな家族をくれて、
ありがとう。

そして今。

俺は、目の前にある大切な家族を失わないように……

「神楽、新八……」

「はあい?？」

「どーしたアルか、改まっちゃって…」

…大好き。

「…ありがとな…」

そして、俺はまた空を仰ぐんだ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0456j/>

銀魂 ジジイになってもあだ名で呼びあえる仲間をつくれ

2010年10月9日00時10分発行